

2. 総合学習の基本を学び、体験を生かした「福祉」の学習

— 「附中生にできる福祉活動」を通して —

渡 部 睦 浩

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

現在、学校で教科を通じて生徒が学習する内容は様々なことからである。しかしながら現代社会そのものが刻一刻と変化を遂げており、静的な過去の文化的現象を学習しているのみでは追いつかず、変化を続けている社会現象を追求し、しっかりと現代を見つめていくことが重要な学習となっている。このような激変する現代においては、実際に社会的な現場へ行って、どのような社会的な活動が行われているのかを理解し肌で体験することが最も重要である。

本講座名を「附中生にできる福祉活動」としたのは、中学生として特別な能力や知識・技能を必要としなくても、何らかの形で福祉活動ができると予想した為である。また自発的に「自分に何ができるのか」を考えた上での活動となるよう、最初の段階で活動内容についてある程度のあいまいさを設け、全体で統一することは避けた。

(2) 学習活動の工夫

いざ「福祉」の学習を総合学習で学ぶといっても実に広範囲で内容も様々である。これを教師が文献や調査をすることでまとめ、生徒に情報提供していく手法では、総合学習の特性が活かさない。本講座では、学校内で実施したガイダンスで「福祉」の様々な側面を簡単に説明することのみとした。その後、まず実際の福祉現場についての初歩的な理解をするため、「いきいきプラザ島根」を訪問した。そこで島根県の福祉の現状と「中学生にできることは何か」ということについての講義を受けた。時間的に余裕のある夏休み前に課題の形で夏休みに準備できそうなことについて指示をした。夏休みを経て、資料収集や今後の自分のテーマを決定した状態で、二学期の訪問の時間を迎えることとなった。

訪問は二回実施し、一回目は「島根県厚生センター」を訪問した。その後二回目はそれぞれの活動の場を訪れた。事前の連絡や交渉が複数箇所について必要であったが、訪問の人数が少数となり、結果的には深い体験となったのではないだろうか。また引率上

の問題も、教育実習生の学生に協力をしてもらうことで解決することができた。

それぞれの訪問が貴重な体験となるよう、事前に質問を準備していた。また訪問後、生徒によっては自主的に訪問先の文化祭にボランティアとして参加するなど、郊外での活動にも積極的に加わることができた。

2. 目 標

- (1) 附中生にできる福祉活動とは何かを考えることができる。(仮設の段階)
- (2) 実際に福祉の現場を体験し、自分達にできることを実践する。
- (3) 体験を終えてから、再び(1)の仮設をもとに自分なりの考えを持ち、福祉についての興味・関心を深めることができる。

3. 体験を生かした学習計画

7/14 「いきいきプラザ島根訪問」
介護研修センターにて研修

----- 夏休み -----

9/13 「厚生センター」訪問
※一部の生徒は学校で訪問の計画を練るため学校に残った。

9/28 「島根県立松江整肢学園」
「特別養護老人ホーム津田の里」
「特別養護老人ホームうぐいす苑」
「特別養護老人ホーム松楽苑」

以上の4ヶ所を訪問

※「厚生センター」を活動の中心とした生徒は学校で資料や体験のまとめを行った。

体験を生かした学習計画となるよう、学習の場面を大きく2つに分けて設定した。一つは「福祉とは何か」を福祉現場におられる方から直接聴くというもの(7/14「いきいきプラザ島根訪問」)。もう一つはその体験をもとに中学生にできる福祉活動を行う実際の活動としての体験である(9/13、28)。

実際の活動が複数の場所、複数の実施に設定されているのは、活動の内容が小グループによって違ったためである。また体験活動の日程調整が同じ日に設定できなかったためである。

4. 体験を生かした学習の実際

(1) 「いきいきプラザ島根」訪問

この施設名は松江市東津田町にある総合的な福祉施設の総称である(写真1)。施設内には前述した介護研修センターをはじめ、「県立福祉センター」等、様々な福祉に関する行政機関があり(写真2)、福祉と生涯学習に関することをはじめ、情報の収集、提供、人材の養成、各種の相談や支援をしている。

写真1

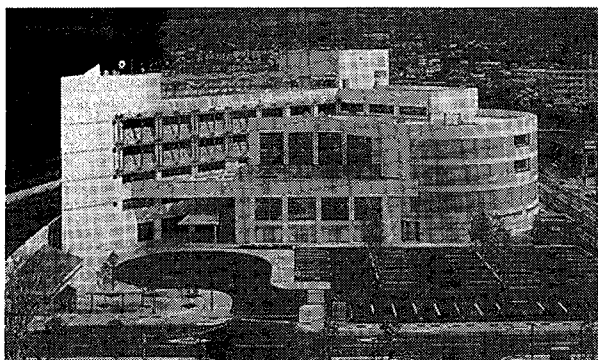
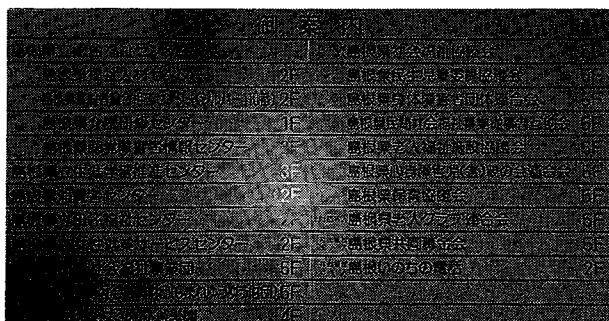


写真2



訪問の際には、講義形式による福祉についての話と福祉用具展示ホール(介護研修センター内)の福祉器具を用いての介護の仕方などを学んだ。生徒が学習した主な内容は下記のようなものであった。

A. 福祉についての話から

- a) 高齢者の多い島根県の現状
- b) 他国との比較
 - (いかに早いスピードで日本が高齢化社会となったのか、他国では例をみないほどの早さで高齢化社会へ突入した日本)
- c) 若い人と高齢者と言われる人々の違い
 - (科学的な実験結果から)
 - 運動能力の低下
 - 重心の変化(バランスが取りにくい)

目の働き、視力、遠近感が分からなくなる。
身体の機能の低下

- d) 在宅介護について
- e) 高齢者にとって住み良い住宅とはどんなものか
- f) まとめ

B. 介護研修センター(福祉用具展示ホールでの学習)

- a) 車椅子の介助の仕方
- b) 様々な介護器具の説明

福祉用具展示ホール内には最新の福祉器具が展示されている。これらは実際に手にすることができ、機器を利用して生活をしなければならない方々の気持ちに一步でも近づくことができたのではないだろうか。車椅子の介護についての研修では、全員が介護される側、する側の両方の立場にたって研修した(写真3参照)。

写真3

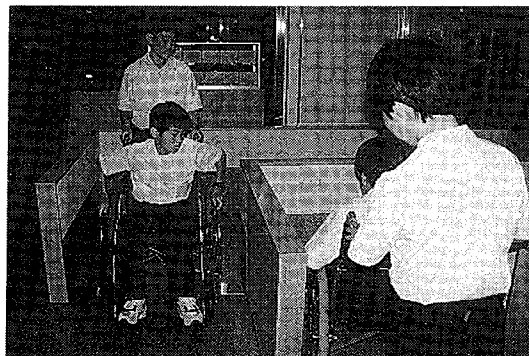


写真4



坂道を昇り降りする際の恐怖感、介護の際に知っておかねばならない技術的なことについても知識として学んだ。日常、普段なら気にもとめないような僅かな段差でさえ、車椅子の生活にとってはとても越えることが難しいことに気づいていた。また廊下の規格一つで車椅子の利用者にとって、大変生活しにくい環境となることも、実際に目の前にすることで感覚として覚えることができたのではないかと(写真4)。

すべての専門の分野の知識や経験を、一教師が全て持ち合わせているはずもない。もし郊外に行かないで、「福祉とは何か」について文献や個人的経験からのみ生徒に教えたのでは、十分な学習とな

り得たかどうか予想がつかない。第一線の福祉現場に携わっておられる方に福祉の現状を様々な角度から教えていただくことができ、大変有意義であった。

写真5

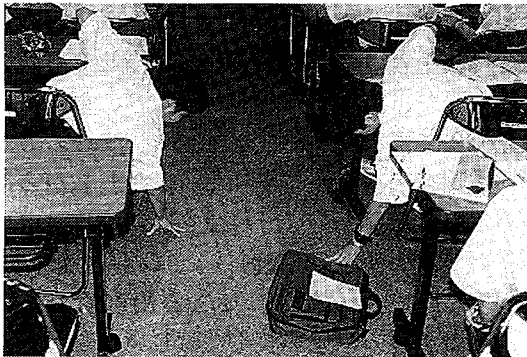


写真6



写真7

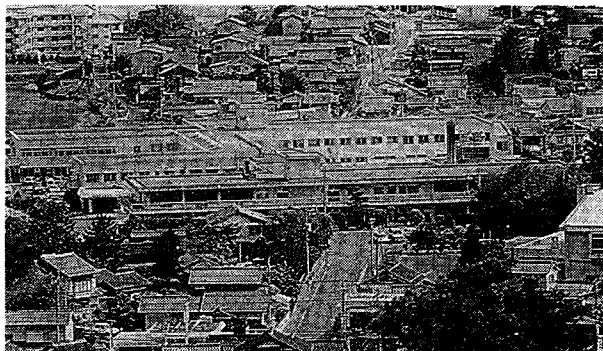


また介護される方々が生活しやすい用に、床の材質がコルクを固めたものでできたり（写真5）、鏡に傾斜があったり（写真6）、風呂の底そのものが上がり下がりする介護専用の福祉機器（写真7）に新鮮な驚きを感じていたし、また深く感心していた。この訪問はこれから自分たちでできる福祉活動を考える上での一つのきっかけとなっていたはずである。

(2) 「厚生センター」訪問

夏休みあけの9/13日に、松江市上乃木町にある

写真8



県立厚生センターを訪問した。この施設は、身体障害者養護施設（晴雲寮）、特別養護老人ホーム（八雲寮）、肢体不自由者更正施設（東雲寮）の3つの施設を併設する県立民営の総合福祉施設（写真8）である。島根県が社会福祉事業団に委託し、運営されている。

生徒が施設を見学する際に、注意を受けたのは次の三点であった。

- A. それぞれの部屋は一般的な住宅内の個人の一部屋と見なすこと
- B. 廊下での挨拶はしてもよい
- C. 部屋をのぞいてはいけない

見学の前に、施設の役割や福祉についての話を聞いた後、施設内を見学した。前述したように3つの施設が併設されているため様々な工夫と介護機器が目についた。歩行訓練のための補助機器（写真9）

写真9

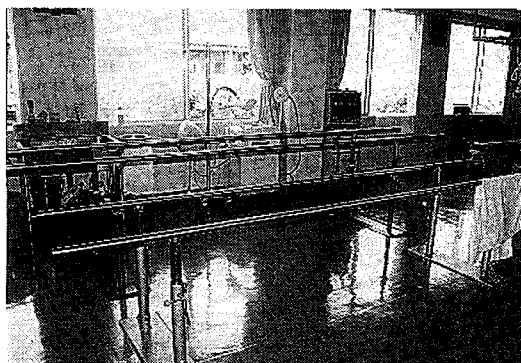


写真10

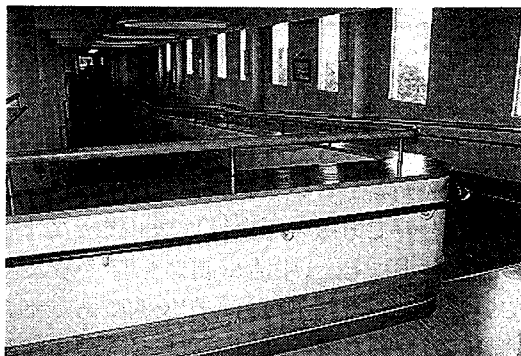


写真11

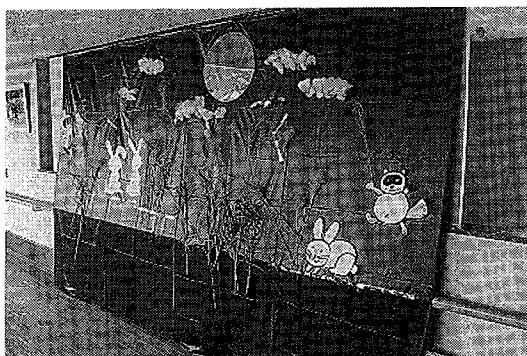


写真12



写真13



写真14



があったり、長く広い規格のスロープが整備されている。(写真10)

利用者の方々が生き生きと生活するために、趣味のクラブが充実しているし、廊下の掲示物が季節感あふれるものである(写真11)。案内をして下さった方の説明の中にも、「生活に潤いを与えるよう工夫している」という言葉があり印象的であった。

この日、安来節を歌う会があり、一部の生徒が参

加させて頂いた(写真12・13)。東雲寮には、更正訓練として木工芸のための部屋、ワープロを使用した印刷科の職能訓練などが行われており、社会復帰する準備をするための施設がある。また希望にあふれた自律をするために役だっていた(写真14)。また生徒は利用者の方々との交流を目指してその場に臨んだものの、勇気が出せなかったり、車椅子の介助が十分にできなかつたりして同センターの方から厳しい言葉を頂く場面もあった。しかしながらそれにもめげることなく、自分が役立つためにはどうすればよいのかこの日の経験をもとに考えていた。

今回の訪問で、「中学生にできる福祉活動」とは何か、現場からの意見を教えて欲しいと質問したところ、「落ちた消しゴムをさりげなく拾ってあげる気持ちが必要である」と助言を得ることができた。この「さりげなさ」がとても大切で職業として介護したり援助したりする場合でなく、ごく一般的な福祉への気持ちは「さりげないやさしさ」から始められることを学ぶことができた。ただそうはいっても介護の技術的な知識がなく、精神的に成熟していない中学生に何ができるのか再び考えさせられる機会となった。

その後、10月29日に行われた同センター文化祭「あいおい祭」4名の生徒がボランティアとして喫茶店での手伝いをしている。障害を持っている方々と接することができたわけだが、日常生活での自律の度合いが分からず、「気を利かせすぎて失礼にあたることをしたのでは」と心配をしている生徒もいた。多くの生徒や職員の方が交流をするためには一回の訪問では不十分であるという感想を持っていて今後の活動の参考となった。

(3) 「松江整肢学園」訪問

前述3.「体験を生かした学習計画」で記したように9/28日の訪問場所は、複数であった。ここでは引率をした「松江整肢学園」の体験について記することとする。

この施設は松江市東生馬町にあり、小児整形外科的施設から心身障害児の総合的リハビリテーション医療・福祉を担当する島根県東部の拠点施設として発展したものである。利用者は脳性麻痺等の肢体不自由児が中心で、入所や通園により治療と機能訓練を受けているという。

この日、施設についての説明に続き、施設内を案内して頂いた。その後、言語療法に携わっておられる言語療法司と一人の利用者の方が協力して下さり、生徒達との交流の場を持つことができた。

言語療法司の方が教えて下さったことの中で特に

印象的だったのは「ことばによるコミュニケーションが人間同士の意志伝達の全てではない」ということである。そして介護をする際に必要なことは唇の動きに注意を払い、スムーズに意志の疎通ができなくても、どこが不明瞭であったのかきちんと問い直すことが大切であるという。また向いあって話をすることが大切であり、言葉を発する速さについて考慮することはとても大切なことである。ゆっくりと明瞭で丁寧に話すことが重要であるとの指摘もあった。また補聴器がすべての音を同じように大きくしてしまうため、不必要に大きな声を出すと相手に迷惑となるのだという。ひとつひとつのことばを、体中を振り絞るようにして発して下さった利用者の方と、生徒は積極的に意志の疎通を計ろうとしていた。またその言葉を発する様から一語一語に込められた利用者の思いを感じることができたようである。

施設の行事や運営を行っている職員の方々が特に強調されるのは「ノーマライゼーション」という言葉である。これはスウェーデンで精神障害者への対応からできた語およびその考え方で、「障害者を特別視せず、普通の人と同じように受け入れ、必要な処置をしていく」という考え方である。また社会福祉一般の考え方として国際的にも定着している。その他、職員の方々が気をつけておられるのは、行事への参加や学園そのものを理解してもらうこと、閉鎖的な閉じた環境とならぬよう、地域交流レクリエーションを行うこと、さらに利用者の児童のために四季折々の行事を行うことである。障害を持つというのはその人の運命までも変えうる重大なことである。しかしながら障害にこだわらず「たまたま障害を持った」と考えるべきであるとの話があった。

「人の生活にもっとも必要なのは、「ハレ」と「ケ」の感覚であり、職員は、日々の生活の中、年間の行事計画の中に、いかにして変化をつけるのかを考えることが重要なのだ」という発言から今後の総合学習で中学生ができることを考える大きなヒントとなった訪問であった。

5. 学習の成果と課題

郊外との交渉を通じて、生徒は相手に失礼にならないよう、電話を掛ける際の言葉遣いやその他のマナーを考えることができていた。各々の訪問先で聞くことができた話の内容や、ことばそのものが生徒の心にとっても印象強く残ったようである。また職員の方が「(交流の前に) まずは知ることが大切である」と教えて頂いたことがこの学習の大きなヒントとなっていたようだ。また老人ホームで利用者の方々

の明るさに感銘を受けた生徒もいた。片手で黙々と編物を編んでいる方を見て、障害にも負けず遅く日々を送っているという感想を得た生徒もいた。またこれまで障害を持っている方々のことを考えたことがなかった生徒もいてこの学習が貴重な経験となったであろう。

6. まとめ

今回の学習を通じて、「附中生にできる福祉活動」とは、様々な福祉施設の利用者の方が日常生活の中で季節感を感じたり、生活の張りを感じるができるよう活動することであると強く感じた。日常の中で、「ハレ」や「ケ」の変化があれば生き生きと毎日を送ることができるのではないだろうか。また生活の基盤となる援助は、やはり職業として高度な知識や技術、様々な機器のことを熟知している専門の方ならではの活動であり、中学生では援助が難しい。また車椅子を押すことでも、介護研修センターでの訓練だけでは十分でなかったという生徒の声もあった。さらに一度や二度訪れただけでは、お互いを知り合うところまでいけるはずもなく、何度も通う中で交流が深まり、信頼関係が生まれてくると感じた。

生徒の反省から、これまで障害を持った方々について考えたことや身近に接したことがない生徒が意外に多かった。このような生徒にとっては福祉について概説的な話を聞いたり、実際に福祉の現場にいて自ら福祉現場での経験を得ることは非常に貴重であったと言えよう。施設の方々が中学生に期待しているのは話相手になってくれることである。特別な援助よりも、実に日常的なことで交流の第一歩を踏み出すことができる。このような交流を通じ、障害を持つ方々や老人の方々を、特別視したり差別することがいかにいけないことを学んだはずである。

人が精神的に充実するためには、「他の人に自分のことを認めてもらっている」という確信が必要である。障害を持ったり、悩みを抱えたり、寂しい状況であればその気持ちはなおさらであろう。また日常の中に変化があり、その中で自分が生きてると自覚することも、充実した生活をする上で重要である。もちろん共通な趣味を持ったり、活動を一緒にできる仲間がいることは大きな喜びとなるはずである。今後、同じような福祉活動を生徒と共に学ぶ機会があれば、この視点からの援助ができればと願っている。

(わたなべ むつひろ・英語科)